この不思議な隣り合わせの国

——スコットランドとアイルランド・比較史的考察断片——

高橋哲雄

はじめに

「この不思議な」という、ちょっと人の気を引くようなタイトルを掲げましたのは、実は苦しまぎれのことです。会をお世話下さっている本多三郎さんに演題を出さねばならぬ時が迫ったのに、中味は一向に煮詰まってこない。少し風呂敷を広げすぎたせいかも知れませんが、わからぬところだらけで、仲々前に進まない。実は、あとで申します理由から「この哀しい隣り合わせの国」とでもしようかと考えたりもしたのですが、それではことの一面しか映し出せぬことになり、私のイメージとは少し違う。ならば、私にとって「わかりにくい」、「謎が多い」、あるいは「ミステリアスな」両国の間柄という印象を、いっそそのままタイトルにすれば、とりあえずは前に進むのではないかと、まあそういったいい加減な心根から付けた題でありまして、もしそれに惑わされてお出になった方がいらしたらお詫びせねばなりません。

今日の話はスコットランドとアイルランドの対比がテーマです。地理的に近いだけでなく、歴史的にも直接間接に影響し合うところが大きい関係に立ちながら、相当に違った——というよりしばしば対照的な——道を歩むことになったこの両国の運命を比べてみます。またそれがどういう原因からか、分岐点があったとすればそれはどこなのかを、考えてみたいのです。今日の集まりは関西アイルラン

ド史研究会の発会をめざしてのもので、当然アイルランド研究者の方が多くみえていますので、両国の比較といっても、実際には主としてスコットランド側の例をご紹介するようにしたいと思っています。

二つの国の共通性

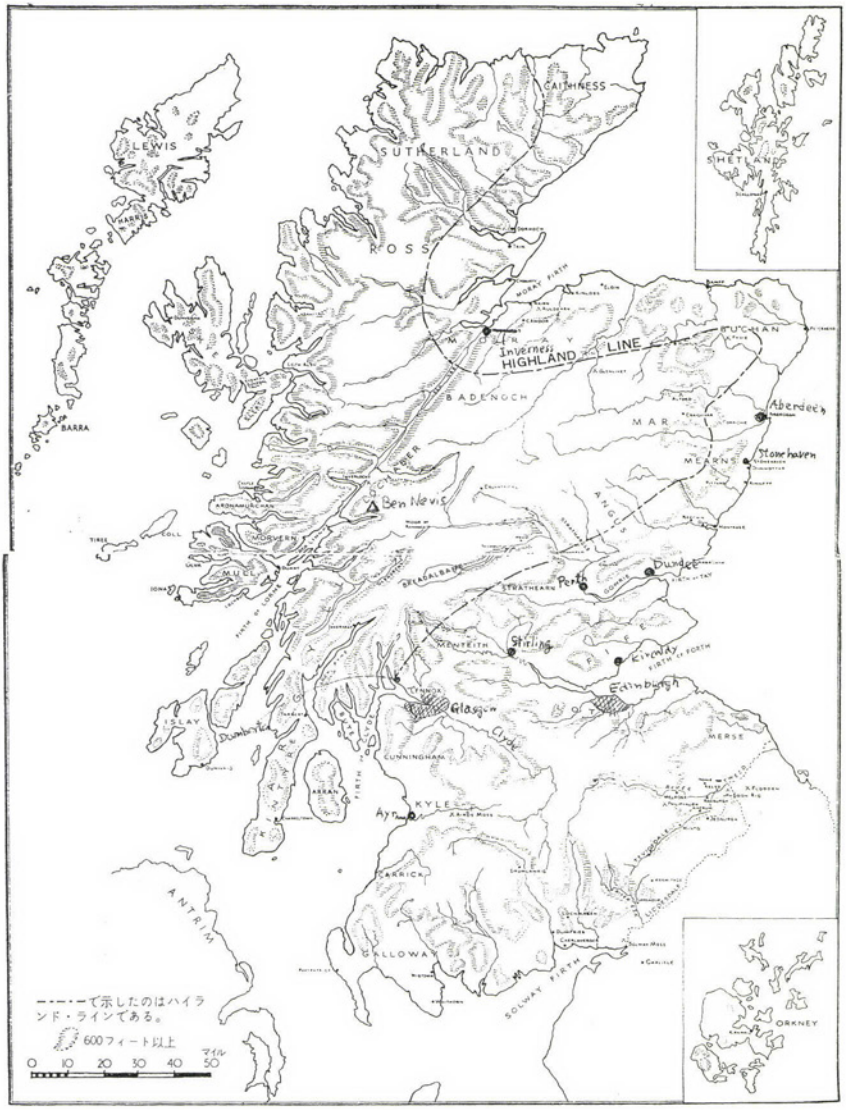
話の順序として、両国の類似点の手短かな紹介からはじめたい。第一に、どちらもコーンウォルやウェールズなどとともに「ケルト周縁地域」(Celtic Fringe) に属し、元来は民族的にも共通するところが多いということがあります。ケルトといってもいろいろで、スコットランドにはピクト族もブリトン族もいたのですが、スコットランドという地名そのものが、もとはアイルランドから移住したケルトを指す「スコット族」に由来するほどで、両国のこの点での共通性は動かぬところです。

二つ目は、ともに隣接する強国イングランドへの長い従属・被支配の歴史を持っていることです。といっても、その支配・従属の程度や性質にはかなりの開きがありました。スコットランドのばあい、一六〇三年からはスコットランド王であるジェイムズ六世がエリザベス一世の死によってイングランド王を兼ねたのですが、そうしたことは形の上だけでもアイルランドとの間では起こりえなかったことです。また一七〇七年の英蘇合同と一八〇一年の英愛合同の重みは相当に違ったものでした。

第三に、二つ目と表裏をなす要素ですが、どちらの国もナショナリズム志向が強いことです。今もそれをともに引きずっていることは、北アイルランド問題や昨年九月のスコットランドの権限委譲にかんする住民投票の結果にもうかがえます。

そのさい注意したいのはナショナリズムといいましても一枚岩ではないことで、それが第四のポイントです。これは少し立ち入って話しておく必要がありましょう。アイルランドが現在の共和国と英領の北アイルランド、あるいは歴史的には少しずれますがアルスターとに分けられること、また見方によっては東部と西部という分け方も可能であることは周知のことですが、スコットランドにも同じような二重構造があります。北西部に広がるハイランドとその北・西の島々、と中央低地を含むロウランドがそれで、両者の境界を「ハイランド・ライン」と呼びます（図1）。この両側で、すべての条件がきれいに別のものになるわけ

図1　Highland Line



出典：G. ドナルドスン／飯島啓二訳『スコットランド絶対王制の展開』（未来社）
但し、人によって線引きはさまざまである

ではありませんし、言語、人種はかなり混ざり合っていますが、地勢、気象などの自然的条件の差異を基礎にして、社会制度や生活文化、精神風土を異にする人びとがほとんど別世界をつくって暮らしてきました。両者の間では人や物の往来も少なく、互いに異人種といってよいほどの疎隔した感情がありました。とくに一六世紀以来、少なくとも一九世紀後半まで近代のほぼ全時期をつうじて政治・経済・文化のほとんどの面で中心を占めた低地スコットランド人にとっては、ハイランドは牛泥棒や殺人の横行する物騒な治外法権的地域であり、ハイランド人は野蛮でおくれていて怠け者であるという認識が一般的でした。それはアイルランド人に対する優越感と共通するところがあり、ハイランドは「スコットランドの中のアイルランド」と呼ばれてきました。ちょうどアルスターが「アイルランドの中のスコットランド」と呼ばれるのと表裏の関係にあったのです。

ではそのハイランドとアイルランドの間柄はどうかというと、これまた愉快な話ではない。古代から中世にかけてはアイルランドの方が文化的先進地で、ローマと対抗しうる独自のケルト・キリスト教を生み、スコットランドはそのブリテン島や大陸への伝道の前哨基地のような役割を果たしました。五世紀末にはアイルランド人が大規模に入植しスコットランドで最初の王国をつくりました。スコットランドは「小さなアイルランド」と呼ばれていたのです。そうした状況は一八世紀には完全に逆転します。アイルランドからスコットランドへの移民は続く、というよりはるかに大規模になるのですが、それはもはや文化をもたらす人ではなく、貧しい祖国では暮しの立ちゆかなくなった人でしかありませんでした。

一八世紀後半からスコットランドでは運河の時代がはじまり、やがて鉄道の時代に引き継がれて長期にわたって大量のアイルランドの労働者が流れ込んできたのですが、それはまたハイランドで大規模に小作人の追い立てが実施された時期でもありまして、両者が仕事を奪い合うかたちになりました。じゃがいもの病気による飢饉の時期も重なったりしました。グラスゴウの一帯はハイランドにも近く、海を越えてアイルランドにも近いので、両者の流入の中心になり、大きな都市スラムが出来ました。低賃金競争の上に生活習慣の差も加わってエスニックな敵意までが醸成されたのです。

低地地方人はこの両者を見くだす立場でした。そのうえ彼らは一七世紀以来北アイルランドにかなり移住して、今日にいたる北アイルランドの支配層を形成することになります。そうした「人の下に人をつくる」ような状況がこんなに小さい国の中で形成されたのです。はじめに、この講演のタイトルを「この哀しい隣り合わせの国」にしようかと思ったと申したのは、その辺の事情を思い浮かべてのことでした。一九世紀末にはアイルランドの土地戦争からハイランドの小作農が抵抗運動の進め方を学ぶといったこともありましたが、全体の動きからすれば小さな傍流にすぎませんでした。ちなみに現在の両国の人口は、どちらも五〇〇万人余り（アイルランドは共和国が三五〇万、北アイルランドが一五〇万）ですが、一八四〇年代の大飢饉前にはアイルランドは八二〇万人、それに対してスコットランドは二六〇万人にすぎませんでした。両国の発展のかたちの差がうかがわれます。

ナショナル・アイデンティティの問題

そうした地域的二重構造が存在するにもかかわらず、スコットランドにもアイルランドにも〝ネイション〟としての一体性もまた厳存します。ナショナル・アイデンティティ（民族としての一体性）といえば、ふつうの民族国家であれば共通の人種、言語、国制、宗教、風俗習慣、軍隊、歴史（伝統）といった多様な要素への帰属感が思い浮かびますが、スコットランドのばあい、一七〇七年の英蘇合同以来「国家なき民族」（stateless nation）なのですから、このうちいくつかは欠けています。独立した軍隊はなく、王も議会もなく、言語もゲール語が学校で教えられている程度です。宗教改革のさい、聖書が自国語訳されなかったことが響きました。法制度や教育制度も、合同のときには独自性が認められていたのですが、一九世紀の間に議会立法でどしどし独自性は薄められて行きました。

それでも自分が「ブリティッシュ」であるより「スコティッシュ」であることを選ぶ住民は今も七割を占め、逆に「ブリティッシュ」である方を選ぶ住民は一割しかいないのです。帰属感を測る尺度としてよく用いられるスポーツをとっても、そういう傾向は明白です。アメリカでなら、テキサスのフットボール・チームがノース・カロライナのチームに負けるとします。ノース・カロライナが次にメキシコと戦うとすれば、テキサス人はまちがいなくノー

ス・カロライナを応援するでしょう。しかし、スコットランド人は、イングランドのサッカー・チームがスコットランドに勝って、次に日本と戦うときには、日本を応援するだろう――とこれはT・C・スマウト教授の話です。イングランドは永遠に「古来の敵」(auld enemy)であり、中世のウォレスやブルースの戦いが毎年サッカー・グラウンドで繰り返されるというのです。

ではなぜそうした一体感を持ちつづけることが可能なのか。これはにわかに答を出せるような問題ではありませんし、本筋からも外れることになりますので、一つだけこれまでほとんど論じられたことのない側面を、問題提起的に指摘しておきたいと思います。それはスコットランドのばあい、一体感の対象が言語、人種といった実体よりはむしろシンボル的操作の対象――キルト、タータン模様、ウィスキー、ネッシー、バグパイプといった――に多くみられることです。王権もその重要な一つで、とくにスチュアート王朝が王位から追放され、権力としての実体を失ったのちになって、ハイランドとロウランドを結びつける紐帯、あるいは象徴としての機能を果たしたことが注目されます。

スコットランド王は、イングランド王やアイルランド王、あるいはフランス王とちがって「キング・オブ・スコットランド」ではなく「キング・オブ・スコッツ」と呼ばれます。つまり民衆の王であり、民衆とのつながりに独特の強みをもっていました。でもそれは王権が強力だからではなく、むしろ逆でスコットランドでは、地理的な理由もあって地方の氏族や豪族が伝統的に力を持っていました。王は「自由放任王権」といわれるほど、徹底的に行政、裁判、軍事権を地方の豪族に委ねてきたのです。また中世以来、他からの侵犯以外戦争がほとんどなかったこともあって、王は一七世紀後半までほとんど税金を取りませんでした。ということは収奪がないのですから、宮廷(コート)と地方(カントリー)――貴族や都市、議会――との緊張関係も生まれようがなかったのです。ときには国王が教会や貴族、商人の富を取り上げたりすることはありましたが、制度的な収奪ではありませんでした。とくにハイランドではそうで、ジェイムズ六世の下での集権化の進行までは、北はゴードン家、西はキャンベル家の統治に事実上委ねられていました。

いや、それはおかしい、一六世紀にはメアリ女王がカトリックの大貴族をみずから兵を率いて討伐したことがある

ではないか、外にもそうした例はいくらもあったはず、といわれるかもしれません。けれど、女王は手兵をもって戦ったのではなく、他の豪族の兵力を借り、それに王の権威を加えることで討伐できたのです。一つの貴族を倒すためには他の貴族や教会、都市住民の力を借りることが絶対に必要であって、そのためには以前に王を裏切った貴族を許して、いま背いた貴族を倒すのに使うといったことは日常茶飯的に繰り返されていました。うかつには常備軍など持たぬほうがいいとまではいえませんが、マシーンとしての王の弱さはけっして政治的な弱さではなく、高度に分散的な、土豪の権力の分立した社会の統合者として、王冠はそれなりの力を持っていたのです。

メアリ女王やボニー・プリンス・チャーリーの、今日も絶えることのない人気は、彼らがイギリスと善戦して敗れたことによりますが、同時にスチュアート王家に属していることにもよると考えられます。メアリは従姉妹ちがいのイングランド女王エリザベスと張り合ってしばしば彼女の鼻をあかせ、ついに彼女の下に長く幽閉されたのち処刑され、ボニー・チャーリーはジャコバイトの乱を起こしてイングランド中部のダービーまで兵を進めましたが、結局はフランスに亡命。彼らは筋目正しい敗北のスコットランド王族として、ロマンティックなナショナリズムのシンボルとされたのです。チャーリーの人気には一種貴種流離譚的な趣もありました。スチュアート王朝が消えてからその王たちの人気が出たということは、低地スコットランド人が、かつては軽侮の対象としていたキルトやバグパイプ、タータン、ハイランド・ダンスなどハイランドの特産を、スコットランド全体の民族的アイデンティティのシンボルとして受け入れるようになった事情と同様であると考えてよいかと思います。

二つの道標

スコットランドとは何かという議論はそこまでにして、ではアイルランドとはどうちがうのかの比較が次の問題です。それはまた、まえにみた両国の力関係の逆転がいつどのように起こったのかという問題とも関わります。スコットランド側では、近世初期以降の三つの事件——宗教改革（一六六〇）と英蘇合同（一七〇七）、それにスコットランド啓蒙に導かれた一八世紀の文化的達成——が今日にいたる両国の差異をつくり出すのにもっとも大きく貢献した歴

史的要因とみてよいかと思います。同時に、それらはスコットランドのアイルランドに対する優位を生んだ要因でもありました。言いかえると、近現代における両国の個性差が完成したのは一八世紀以後のことなのです。以下、どういう違いがあるのかを、少し立ち入ってご紹介したいと思います。

今日にも痕跡を残す両国の文化的差異を端的に示す例からはじめましょう。二枚のスライドをごらんください。一つはアイルランドの地方道の道標を、もう一つはスコットランドの、やはり地方道を写したものです。私はいろいろな都合からヨーロッパではこの二〇年余りレンタカーを使って地方を回っていまして、各国の道路事情については相当な僻地についても通じているつもりですが、この写真はそれぞれに両国の文化的特徴をよく映し出している

写真1　アイルランドの地方道の道標
（数字はキロだったりマイルだったり）

写真2　passing place の見通しやすいスコットランドの田舎道

――つまり、他国にはめったにみられない風景であるといってよいかと思っています。

第一のスライドですが、これはアイルランドの地方道ではごくふつうにみられるのに、他の国ではめったにみられない道標です。鉄のポールが立っていて、そこから放射状に――十字路であれば四方に、五叉路であれば五つの方向に――行先を示す矢印のパネルが出ていて、その矢印は実際の方向に忠実に向けられています。これはドライバーにとっては至極厄介な代物でして、たとえば左前方に進むときは交差点の中央をすぎて振り向き気味にのぞかないと、正しい方向に進んでいるかの確認ができない。ということは、その段階で方向を変えようとしても間に合わないし、第一危険きわまりないのです。ですから交通量が多いと、車を交差点の手前で止めて、歩いて確かめに行かねばならない。つまり、この道標は歩行者か馬者の時代にふさわしい代物なのです。また、アイルランドは地図の出来もよくないし、道を訊ねても地図を描いて道を教えることを苦手とする人が多いように見受けられます。詳しいことは以前に出した本（『アイルランド歴史紀行』ちくま学芸文庫）に書きましたが、どうも国全体が一つの大きな村のような〈田舎の国〉であることに関わりがあるのではないかと、私は思っています。

ところが、スコットランドを訪ねますと、もっともカントリー的であるハイランドを回っていても、道をきくと進んで図を描いて説明してくれる人がずっと多い。それに道自体がちがいます。シングル・トラックでアイルランドに劣らず道は細いのですが、ところどころで道を片側にふくらませていて、対向車をやりすごしたり、追い越させたりするのに使うという方式が広く採用されています。これを〝passing place〟といい、写真をご覧になれば分かるように、かなり規則的な間隔をおいてつくられ、その場所を示すよく目立つポールが立っていて、かなり離れたところからも、どこまで行けば車をやり過ごせるかが一目で見当のつくようにレイアウトされています。ですから、道は細くてもスピードは落とさずにすみますし、不要に道幅を広げずにすみます。お金も使わず、環境も風景もこわさずにすむわけです。日本にもむろんこういう場所はあるわけですが、地形上それ以上道幅を広げられない見通しのわるい崖道などに「待避所（ウェイティング・プレイス）」としてやむをえずつくられているのが圧倒的です。たいていは道を広げることで〝解

決〟を図っているわけで、「スーパー林道」などというのがそれです。

この二つの道標のちがいは何をあらわすでしょうか。「非合理」と「合理」の差といってもいいでしょうし、「前近代」と「近代」のちがいといっても大きな誤りではないでしょう。でもアイルランドを単に「非合理」と括ったり、スコットランドを「近代」と割り切るのには、いささか抵抗を感ぜざるをえません。アイルランドは非合理というよりはむしろムラ的というべきですし（ムラにはムラの合理性があります）、他方「近代」といえば道を広げて観光施設をつくり人寄せをするイメージがありますが、あの画面のスコットランドはどうもそういうものではない。スコットランド史をかじった者の眼には、スコットランドの近代をつくった「スコットランド啓蒙」の――かつては「スコットランド常識哲学」とか「スコットランド歴史学派」と呼ばれたことにも示される――現実から離れず人間くさい、堅実な理性の尊重を想い出さざるをえないのです。そういう運動があったか否かがスコットランドとアイルランドの差異の大きな部分を形成しているように、私には思えます。

スコットランド啓蒙

「啓蒙」とは、理性の光に照らし出すことによって、人間や社会の遅れた部分を向上させようという思想運動であることはご存じの通りです。人間の生得の理性を信じるのがその第一歩ですから、当然理性を超えた「啓示」や「恩寵」の光に頼る教会とは対立することになります。この運動のもう一つの中心だったフランスではそれが極端に進んで無神論や唯物論にまでゆく傾向がありましたが、スコットランドでは理神論といったより穏やかな形が主流になります。認識の仕方も、自然権や自然法によりながらも、多分に経験主義的でした。また向上、進歩の概念が中心にあったことから、歴史や変化、そして教育への関心が生まれました。小は化学変化や言語の変化から大は地殻変動に至るまでそうでしたが、何といっても中心を占めたのは社会の改善で、そのため道徳哲学、法学、経済学の諸分野への実践的関心が集中しました。

また教育・啓蒙活動に重きをおいたことは、大学の改革を初めとして、町の学校や学術振興のための団体、クラブ、新聞雑誌の創設、出版、印刷などが都市部、とくにエ

ディンバラで活発に行われたことに示されています。スコットランドの四大学が一八世紀には自然科学と社会科学でオクスブリッジをはるかに凌ぐ実力を誇っていたことは広く知られているとおりで、ブリタニカ百科辞典もスコットランドで編集されました。黄金時代のエディンバラでは街の中心から三分以内で五〇人もの世界的な、天分と学識のある人たちを集めることができるといわれたりしました。ヒュームやスミス、ブラックやハットンがその人たちであることはいうまでもありません。

そうはいっても、エディンバラもロンドンに比べるとはるかに小さな都市でしたから、たとえばデフォーのような独立の文筆家が食っていけるだけのふところの深さはなく、世論をリードしたのは大学教師か牧師、あるいは貴族の家庭教師、または貴族自身といったところでした。啓蒙運動がほぼ終りに近づいた一八〇二年にロンドンに出たジェイムズ・ミルはエディンバラ大学で教鞭を取っている旧友宛に次のように書いています。「当地（ロンドン）は文筆家にとっては最適の場所です。当地ではすべての人びとが貴方の立てるもっとも空想的な計画でも賞賛します。スコットランドでは決まった道から一歩でも踏み出そうとするとすべての人が抑えにかかるのです」。ミルは郷里で受け入れられた人ではなかったので、多少の被害者意識はあったでしょうが、こういう革新的なものへの温度差が当時あったことは多分まちがいないでしょう。

にもかかわらず、ミルの時代から一九世紀半頃にかけてのイギリス思想界をとらえた「中世回帰」という、啓蒙主義とは反対のベクトルに立つ思想の流れでも、スコットランドは圧倒的にリードしたのです。詳しくお話する余裕はありませんが、スコットやカーライル、ラスキンを抜きにして、イギリスの中世主義を語ることはできないのですから。

こうみてくると、スコットランドは一八、一九世紀をつうじて、国の大きさからすれば不相応に大きなインパクトを常にイギリスの思想界に与えてきたといえそうです（一八〇〇年でスコットランドの人口は一六〇万、アイルランドは四八〇万、イングランドで九二〇万でした）。アイルランドではその点相当状況が異なりました。スコットランド人がとかく理屈っぽく、思考力にめぐまれているとすれば、アイルランド人の長所はそこにはなく、文学的想像力の世界、とくにファンタジーを生む力にすぐれていたということが

できます。車社会の今日からすれば不思議なあの道しるべも、ひょっとしたら「レプラホーン・クロッシング」の類いのお遊びの延長で立てられたのかもしれません。

実学・実業の雄スコットランド

しかし、スコットランドの文化的達成は、そうした思想面でのリードだけではなく、その思想の性格にもすでに反映されているように、きわめて実学的・実業的性格を持っていました。スコットランドの四大学が、それぞれ実学とくに自然科学や技術系に強いことはよく知られているところです。たとえば医学ではオランダのライデン、ドイツのインゴルシュタット大学に次ぐ名声を博していましたし、技術・工学面でも漂白・染色などでは麻や綿工業の発展を助けました。スコットランド人の技術者といえば、ワット、テルフォード、ジョン・レニー、R・スティーブンスンなど数限りなく、ヴィクトリア時代後期には「スコットランド人のエンジニア」は一つの人間類型として認められるまでになりました。どんな蒸気船に乗っても、機関室で「ヘイ、マック」と呼べば、必ず返事があるなどといわれたのです。明治日本のお雇い外国人でも、その五〇%、約二〇〇〇人が英国人で、その多くがスコットランド人でした。有名なグラバーは政商ですから別として、工部大学校を設立したダイヤー（技術教育）、上下水道のマッキントッシュ、燈台建設のブラントン、軽井沢開発のショーなど目白押しで、日本からの留学生の受け入れ先も明治期を通じてスコットランドの四大学はロンドン大学やオクスブリッジと肩を並べて一〇〇人を数え、その他は一、二人ずつにすぎなかったといわれます。それに対してアイルランド人技術者といえば、いま確認できるのは大阪鉄工所を設立したハンターぐらいのものでした。ついでにいいますと、夏目漱石に直接影響を与えた二人の英人のうち、一高教師だったマードックは「楽観的な日本近代化論者」のスコットランド人であり、それに対してロンドンで彼の家庭教師に雇われた貧しく不遇で、しかし忘れられぬ印象を残すクレイグ先生はアイルランド人だったというのも、何やら象徴的にみえる対照です。

おもしろいのは造園、建築です。スコットランド人はガードナーとして高い名声を誇ってきました。ご承知のようにイギリスは庭園王国です。一八世紀にはピクチャレスク美学にもとづいて風景式庭園という革命的な新様式を生

み、多くの王侯貴族の庭園が新築・改造されて、ヨーロッパの庭園史を塗り替えることになりました。それら大きな地所のヘッド・ガーデナーはまずほとんどがスコットランド人でしたが、彼らはデザインの革新者ではなく、庭づくりの職人であるか、多品種の植物コレクターである場合がほとんどでした。ウィリアム・ケントやケイパビリティー・ブラウン、レプトン、ヴァンブラなど、造園のコンセプトを根本的に変革した人びとの中にスコットランド人はいませんでした。その結果、スコットランドの庭園は、芸術的には物足りないものとなります。私の好みが入っているかもしれませんが、ミシュランで三つ星を与えられたスコットランド最高の庭とされるインヴェルーでさえも小さな植物園ないし種苗園に森林公園を加味したようなものです（写真参照）。もちろん、エッツルやクラッシーズのようにユニークでとてもいい小庭園もありますが、それらもイングランドだとベスト三〇に入るかどうか疑問とせざるをえません。イングランドでストウ、スタウアヘッド、ラウシャム、ブレニムなどの庭園が芸術の域にまで高められていたとき、スコットランドではキチン・ガーデン（柑橘類やぶどう、ハーブなど）や森林苑が全盛を極めていました。イングランドの造園業者はスコットランドから大量の種苗を輸入し、一八〇〇年頃までリース港（エディンバラの外港）の繁栄を支えてきたのです。スコットランド人は、ジャスティス、ニコル、ラウドンなど、庭園ライターとしても声名がありました。つまり、実地と評論にはともに明るいのですが、美的感覚はいまいちであったわけです。

写真3　インヴェルー・ガーデン（名園で聞えるがまるでキチン・ガーデン）

しかし、何事にも例外はあるもので、同じように応用芸

術分野に属する（あるいは芸術工学分野に属する）建築ではスコットランドは輝かしい才能に溢れた大デザイナーを生みました。一八世紀後半に活躍したロバート・アダムがその人で、エディンバラのシャーロット・スクェアやエアシャのカレーン城などの設計のほかは、むしろイングランドで数多くの館や公共建造物や内装を手がけ、そのロココ的な装飾美は「アダム様式」として一世を風靡したのでした。ただし、彼とその一家はまさに例外的存在であって、イングランドでは同じ一八世紀をとってもはるかに多くの才能を生んだこと、さらにはアダムの作品は彼の天分もさることながら、それ以上にグランド・ツアにおける古代ローマの建築研究の成果であった――と私は思うのですが――そのことを考えるなら、彼の活躍はやはりスコットランド啓蒙という時代の空気の産物である部分が大きかったとみるべきではないでしょうか（彼はアダム・スミスより五歳おくれてカーコーディの同じ学校に学び、交際もありました）。実際、彼の死とともにその名声は一挙に忘れられ、一九世紀のスコットランドでは一転して「不まじめで気まぐれな」建築とみなされるようになりさえしたのです。

ただ、この分野でのスコットランド人の天分のほどについては、アダム没後百年を経て、レニー・マッキントッシュという華麗な才能が現れて、グラスゴウとその周辺を、ナンシー（フランス）やブリュッセル（ベルギー）と並ぶアール・ヌーボー芸術の必訪の巡礼地としたという事実を抜きにして語るわけにはいきますまい。一言申しそえておきたいところです。

さらに、建築との関係でいいますと、一八世紀末から一九世紀初めにかけてのスコットランドではおどろくほど多くのユートピア的コロニーがつくられました。ユートピア思想の大先輩国であるイングランドでも、その頃には一部の地主によって、あるいは恩恵的に、あるいは気まぐれにエステート・ヴィレッジがいくつかつくられたにすぎませんが、スコットランドで町づくりの数が一〇〇を越えたというのはやはり驚きに値します。スコットランド人はユートピアをユートピアで終わらせるのではなく、つくってしまう、というか形にしてしまうのですね。そういえば、ユートピア社会主義の最も偉大な先達であったロバート・オウエンが従業員の福利・教育に意を用いた実業家として名を高めたのはスコットランドでのことでした。彼の理念をモデルにしたヴィレッジもいくつかあります。

こうしたすべてについて、アイルランド人がほとんど見るべきものを残さなかったことは、中世にケルズの書など輝かしい装飾美術の数々の傑作を残した民族であるのにどうしてなのか、信じられないほどですが、ここではその事実を指摘するだけで、先に進みたいと思います。

金融・利殖の才

ところで、スコットランド人は物づくりだけを得意としているわけではありません。カネの面についても彼らは大きな革新を成し遂げました。銀行業への有限責任制の導入、銀行券発行の自由、支店銀行制や当座貸越に当たるキャッシュ・アカウント制の案出、利子支払いによる預金の大々的獲得などは、すべてスコットランドで発明されるかパイオニア的に導入された新機軸でした。彼らはまた早くから不況対策として、現在中央銀行が国際協調で実施している銀行間の銀行券持ち合い慣行を開発したり、貯蓄銀行運動にも手をつけました。実用本位の感覚と信用重視にも裏付けられて、この小さな国の銀行は一七四〇年頃から一八五〇年にかけてヨーロッパのみならず世界のトップ・クラスの地位にのし上がります。S・G・チェックランドは、貧しくてヨーロッパの商業の中心から離れたこの国が、かくもめざましいシステムを開発しえたのは、そのエートスと教育のしからしめるところであり、スコットランド啓蒙の一つの面を形成するのだという見方を示していますが、妥当なところでしょう。

そのスコットランド啓蒙の時代に、当時のこの国の基幹産業であった亜麻工業にブリティッシュ・リネン・コンパニー（一七四六―一九七九）という会社が出来ました。亜麻産業振興を目的として、王の特許を取得した国策会社だったのですが、特許権があると株式のほか債券類の発行も認められるところから、当初は麻関係の業者のみを対象に問屋制的な専門的金融業務を行っていました。ところが、だんだんと製造・販売より金融に業務の重点を移し、一八世紀末にはスコットランドの歳入のロンドン送金といった公金の扱いや、コンソル債その他の公債、公共事業債の募集など、地方銀行的役目を果たすようになり、スコットランド第三の銀行として、一九七九年にスコットランド銀行に合併されるまで活動を続けてきました。製造業の会社が銀行に化けるといった、この珍しい例は、同時代人であるアダム・スミスも、製造業の振興という公共目的

にかなっているとして是認しているように、必ずしも特権的な保護の下に育てられた前期的性格の資本の行動様式の結果ではないようですが、さらに立ち入った研究が望まれるところです（この会社については林妙音さんの詳細な研究が完成に近づいています）。

海洋国民の顔

最後にスコットランドとスコットランド人を語る場合、どうしても欠かすことのできないキーワードがあります。それは「海」です。産業的にみても、一八、一九世紀のスコットランドはイングランドに劣らぬ大海洋国民でした。まず漁業。大船団を使っての北海のにしんの漁撈と酢漬けやくん製などの加工・輸出に始まり、海運業がそれにも触発されて発展します。多数の、のちの巨大海運企業がスコットランドで、またスコットランド人の力を借りて創業しました。キュナード、ホワイトスター、P&Oなどがそうですし、日本と早くにつながりをもち、また阿片戦争の元凶でもあったジャーディン・マシスン商会もスコットランド系企業です。さらにクライドサイドの造船業者がタインサイドと並んでイギリスのみならず一九世紀の世界の造船業をリードしたこともご承知のとおりです。明治日本が「名誉領事」という名のエイジェントを、イギリスでは他の三カ所に先駆けてグラスゴウにおいたのも、造船・造艦企業とのつながりを重視してのことでした。

海を越えての探検・植民活動も同じ〈海外進出〉志向として説明できるでしょう。スコットランドは、かのデフォーの「ロビンソン・クルーソー」のモデルとなったアレクサンダー・セルカークをはじめとして多数の探検家を生みました。ここではリヴィングストンの名だけを挙げておきましょう。植民についても、ヴィクトリア時代の六三年間に一四〇万人の海外移民を出したこと、ノヴァ・スコティアのようにスコットランドの名を冠した多くのコロニーを新大陸につくりだしたことだけを申しておきます。

文学の面にもそうした気質の反映がみられました。冒険小説や海洋小説はスコットランドの、これまたイングランドと並んでお家芸の一つです。R・M・バランタイン、R・L・スティーヴンスン、ジョン・バカン、アリステア・マクリーン、マイクル・イネス、ヘレン・マッキネスと挙げてきただけで、その道に通じた方なら多分大きくうなづいていただけるものと思います。そうした海洋国民的資質

は、アイルランド人にはほとんど無縁のものでした。それについては前著で触れましたので、ここでは省かせていただきます。

このようにみてくると、一八、一九世紀のスコットランドの人材輩出ぶりはまさに目をみはるものがあります。スコットランド嫌いということで聞こえたジョンスン博士が、その英語辞典の「オーツ」（燕麦）の項で「イングランドでは馬が食べ、スコットランドでは人が食べるもの」と定義したのに対して、あるスコットランド人が「だから、イングランドでは名馬が育ち、スコットランドでは人材が育つのだ」とやり返したという話も、なるほどとうなづかされるわけです。

これら人材のほとんどは低地地方の出身です。ハイランドはもっぱら、スイス傭兵と並ぶ名声をもつ精強な軍人の供給源として知られてきました。合同以後ブリティッシュ・アーミーに編入されてからは、バグパイプや民族衣裳の使用公認と引き換えに、植民地拡大や対外戦争のたびに出動、輝かしい勲功を挙げてきました。スカイ島だけで、ジャコバイト反乱直後の一七四七年から八三年の三六年間に二一人の中・少将、四五人の中佐、六〇〇人の少佐、大尉、中尉、一万人の歩兵と一二〇人のバグパイプ奏者が出たといわれます。

ただ、ここで見落とすべきでないのは西欧ロマンティシズムの源流としてのハイランドです。マクファースンという高地人の青年によって一七六〇年代に発掘・翻訳された古いケルトの叙事詩『オシアン』がそれで、その新鮮な魅力は胎動期にあったロマン主義芸術運動に大きなはずみをつけることになりました。ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』の大事なところにも、これが出てきます。フランスでも絵画、音楽、オペラに影響を与えました。ところがこれが意外な面で深刻な論争を惹き起こしたのです。高地人は無知蒙昧、未開野蛮の民であって、そんな中からこんな作品が生まれるわけはなく、これはマクファースンの偽作であるという主張がその一つで、それをもっとも挑発的に述べたのがジョンスン博士でした。彼はヘブリディーズ島まで調査に出かけて、オシアンは実在しないと言い切っています。イングランド人の多くは彼と同じように考えていたようです。またアイルランドでは、オシアンはアイルランドの歌の剽窃にすぎないというきびしい見方が当初はかなりつよかったといわれます。こうした国の内外での半世紀

にも及ぶ騒ぎの中から、当然に研究も進み、それによって古代、中世のハイランドのきわめて水準の高いゲール語文学の実在が初めて明らかになります。それとともにハイランドへの偏見も薄れざるをえなくなってきました。オシアンは低地地方人であるスコットやバーンズの小説や詩と並んで、スコットランドの民族的誇りの対象となり、帰属感の統合にひと役果たすことになったのです。しかし、それはアイルランドと共有し合う面でもありました。『オシアン』がアイルランドの詩人たち、とくにイェイツに影響を与えたことは周知のとおりです。

宗教改革の役割

こうしてみると、この両国のちがいはハイランドとアイルランドとの間でゲール語文学の伝統で共有点をもつとしても、一般のイメージにあるケルト仲間、ケルト周縁地域同士として一括りにできるような生やさしい程度のものでないことがはっきりしたのではないかと思います。しかし、その差異が何によるかとなると、そう簡単ではありませんが、私としては歴史的要因として、宗教改革、合同およびスコットランド啓蒙を重くみたいと思っていることは、すでに申したとおりです。ただ、もう時間がそうありませんので、前二者についてのみ、それも思いついたことを手短かに申し上げるにとどめねばなりません。

まず宗教改革ですが、これが両国の差異を形成する大きな分かれ道になったことはいうまでもないでしょう。アイルランド史の大きな疑問の一つに、なぜアイルランド人はあれだけ長期にわたる徹底した弾圧にもかかわらず、カトリック信仰を捨てなかったのかという問題がありますが、それと対照的に、スコットランド人はなぜ一五六〇年という、周辺国としては早い時期にああも簡単に、しかも下からの運動としてカトリックを離脱してしまったのか、というのが大きな疑問です。イングランドの宗教改革のようにヘンリー八世という強大な王権が転轍機になったわけでなく、逆にスチュアート王家は宗教改革当時カトリック信仰の擁護者だったのですから。

それにはいろいろな理由が考えられます。ジョン・ノックスという強烈な個性をもち、政治的にもしたたかな大アジテーターがいた（さらにウィッシャートのような殉教者がでた）ことは、当時のスコットランドのような小国（一六〇〇年でやっと八〇万人）では大きな意味を持ったことで

しょう。またスチュアート王朝の歴代の王がいずれも早逝し、幼少の王を立てねばならなかったことは豪族の権力を強めたのですが、それら豪族の多くは修道院の財産収奪をねらってプロテスタントに鞍替えしたのです。それにカルヴァン派はもともと中世的な宗教政治的単位としての自治的組合を組織原理としていたから、教皇や国王への集権には反対だったということもあります。庶民、とくに都市住民も、カトリック聖職者の王・貴族と癒着した構造的な腐敗ぶりに反感をもっていました。またイングランドとの国境地方の住民は、カトリック・フランスとの提携によってイングランドからの侵犯が相つぐことにいや気がさし、カトリック連合の解消を望む声もありました。またフランス軍の駐留に伴う住民との摩擦も、反仏・反カトリック感情に結びついたようです。

ともあれ、スコットランドがプロテスタント国になったことは、その経済的・文化的成功に道を拓くことになりました。両者の関連については、スコットランド人であるカーライルが、早くに積極的に評価しているのが眼を惹きます。彼はワット、ヒューム、スコット、バーンズなどの偉才を生んだ一八世紀スコットランドの華麗な文化の開花を宗教改革によるものとし、とくにノックスを讃え「スコットランド人の内的生命に火を点じた」としています。

それに対して詩人エドウィン・ミュアが『ノックス伝』で反論を加えました。ミュアは、なるほど一八世紀のスコットランドは文運盛んであったけれど、宗教改革の次の世紀である一七世紀のスコットランドはイングランドよりはるかに文化は低迷していた。シェイクスピア、ミルトン、パーセルなどの豊かな成果に比べうる何ものも生まれず、その元凶こそノックスであり、彼の非寛容がスコットランドからルネッサンスのあらゆる利点を奪ったのだ、というのです。

歴史家トレヴァ＝ローパーはさらに進んで次のように言います。「スコットランドでは啓蒙主義の種子はカルヴィニズムの公然たる敵の中に見出される。長老派よりジャコバイトやカトリックにさえよりおかげを蒙っている。……ヒュームも一七四五年まではジャコバイトだった」と（『宗教改革と社会変動』）。

ここで魔女裁判などを取り上げると一見突飛なものを引合いに出すようにみえるかもしれませんが、一七世紀のスコットランドでは魔女狩りが広く行われました。一五六三

年、つまり宗教改革の直後に迫害法が出来、以来一七二二年までに四〇〇〇人もの「魔女」が処刑され、拷問も苛酷を極めました。はじめてのプロテスタント王であるジェイムズ六世自身が魔女裁判に熱心でした。アイルランドでは、それと対照的に最初の魔女裁判が一三一四年に行われてから一七一一年までの四〇〇年間に五名の処刑者が出たにすぎません。しかもそのうち四人はプロテスタントによるものでした。イングランドはその中間で約一〇〇〇人と推定されています。対人口比率でいえば、スコットランドはその四〇倍です。およそ理性と寛容に反する魔女狩りがこれほどの規模で行われたという事実だけからも、カルヴィニズムと近代化を直結させる通説的理解には問題があろうかと思わざるをえません。

但し、ノックスの役割は別の面で見落とすわけにいかないと思われます。それは教育の促進です。彼の『第一規律書』では大学の設立まで説かれていますし、教育内容も必ずしも聖書偏重ではありません。教育王国スコットランドの伝統をつくった最初の功労は彼に帰せられてしかるべきかと思われます。

それでは、一八世紀スコットランドの文化的栄光は何によるのか。それは、どの宗派が優位を占めたかといったことではなく、世俗化が進んで宗教的熱狂が去り、面倒な神学論争がなくなったからだ、とN・トランターはいいます。スコットランド人は理屈っぽくて論争好き、原理主義的なところがあり、神学論争が熱狂の対象にならなくなると他の分野に目を向けざるをえなくなり、科学や人文学、芸術に熱中して、黄金時代を創り出したのだというのです。

しかし、宗教的熱狂が去ったということは必ずしも教会の衰退ということではありませんでした。教会はまだ力を持っていたのですが、啓蒙主義を敵視する教会人ばかりではありませんでした。啓蒙主義の一方の旗頭であったファーガスンは牧師で、W・ロバートスンは長老会議の議長でした。ロバート・ウォレス師にいたっては、試験結婚や協議離婚を唱えさえしたのに、教会当局のお咎めはなく、のちに長老会議議長になったほどです。もちろん、理神論者であったヒュームがエディンバラ大学の教授になれなかった件では教会の影響はあったわけですが、一八世紀を全体としてとれば、ジェイムズ一世（六世）自身が魔女狩りに熱中していた一七世紀前半とは教会の空気がかなり

変わったものとなっていました。地球は四〇〇〇年前に出来たとするキリスト教の信仰を地質学の立場からひっくり返してみせたジェイムズ・ハットンがガリレオのような目に遭わず、またガリレオは時代的に早かったとしても、同時代のカトリック教会がヴォルテールに対して取ったような態度を、スコットランド教会が取らなかったこともたしかなのでした。

カルヴァン以上にカルヴァン的といわれたスコットランド教会も変質しました。信仰は個人のものとなり、政治から距離をおくようになりました。聖職者が王や貴族を政治的に動かすという構図は歓迎されなくなり、エリート（地主、商人、法律家、聖職者）の間では宗教的な熱狂は危険なものという認識が定着するようになったのです。その背景には一七世紀の長いヨーロッパの宗教動乱がどちらの側にも勝利をもたらさず、とりわけスコットランドでは激烈な闘争にもかかわらず、夢想した千年王国が到来しなかったという幻滅感が広がっていたこと、さらに国際環境も変わって、かつてはドイツ、スイスの影響の強かった禁欲的で規律を重んじるスコットランド教会も、一八世紀に入るとイングランド、オランダの影響をより多く受けるようになって、比較的自由で寛容な性格に変わったといった事情があろうかと思われます。そうなると、もともと教義の上からも勤勉に親和的であるうえに、仕事の規律、権威と服従、責任、知力の伸長、倹約といった生き方は依然として残していたカルヴィニズムの強味が生きてくることになります。

さらにいいますと、一七世紀にスコットランドではじまったフリー・メイスンの影響もあります。彼らは教会とのつながりや特定の政治信条、会員間の身分差別を許さぬという誓約をもち、これにならった各種のクラブや協会、知識人の団体がエディンバラを中心に簇生し、一八世紀にはそれが全盛を迎えました。人の集まる場としての教会の役割がこれによってかなり小さくなり、聖職者の役割を知識人が果たすようになったことが、スコットランド啓蒙の温床となったわけです。

アイルランドの教会はおよそこれらと対照的な状況にありました。徹底的なカトリック弾圧の下で神父たちは自分もそこから出てきた農民社会に埋没するように、外界との接触を閉ざされてひっそりと生きてきました。カトリック農民が棄教しなかったのは、抵抗精神といった高尚なもの

ではおそらくなく、それよりいい生き方（あるいは死に方）が考えられなかったからでしょう。解放後の教会がナチそこのけの禁書などの守旧性をみせたのは、長い強制された知的停滞のしからしめるところであったはずで、教会が近代の大部分の間文化的ヘゲモニーの一翼を担うといった状況は、考えることもできないものでした。

合同の性格

もう一つの両国の差異をかたちづくった歴史的な分かれ道としては、一七〇七年の合同が挙げられますが、これについても宗教改革についてと同じように話していたのでは、到底時間が足りません。そこで、ここでは英蘇の合同を一八〇一年の英愛合同とちがった性格のものとさせた一つの事件を取り上げて、そこに反映される蘇愛両国の精神風土の差異を、いわば斜交いにのぞきみるにとどめたいと思います。それは合同の直前に生まれ流れたダリエン計画です。

ダリエンとは中米パナマ地峡のことで、この計画は一六九〇年代にスコットランドの地主で議員であるアンドルー・フレッチャーと銀行家でのちに英蘭銀行を創設したウィリアム・パタースンが協力してダリエンに植民地をつくろうとしたものです。当時新世界の富が集中していた太平洋側のメキシコ、ペルーと大西洋側を三〇マイルの陸上輸送で結びつけることによって、数千マイルにのぼる危険なホーン岬経由航路を回避し、莫大な利益を得ることができると考えた。つまり、のちのパナマ運河計画を先取りしたような計画だったのです。事実第二次計画には運河の掘削も入っていました。彼らはそれを当時日程にのぼっていたイングランドとの合同阻止運動と結びつけようとしました。合同は議会の独立喪失と引きかえにスコットランドの商工業に市場の拡大をプレゼントする性格をもっていましたが、独立派は自前の代替的収益源を確保することで、そうした経済的誘惑を封じようと考えたのです。そして国民運動として資金募集キャンペインを展開し、目標金額は小国スコットランドには身分不相応なものだったのに、みごとに成功しました。しかし、イングランドは徹底して妨害に回り、議会はこれを非合法事業としたため、イングランドの投資家は資金を引き揚げざるをえなくなりました。また外交筋を動員してオランダやドイツの投資筋にも資金引き揚げを説きつけました。そのため、スコットランドが調

達せねばならぬ金額は、この国に実際に存在した現金総額の半ばにのぼったといわれます。

そうした渾身の賭けにもかかわらず、結果は惨憺たるものになりました。酷暑、風土病、肉体労働の経験のない若い地主たち、スペイン艦隊の攻撃、現地住民に不適な商品の選択などずさんな計画の実態がたちどころにあきらかになり、多数の死者を出してダリエンを放棄せざるをえなくなりました。収益どころか、国は破産同然。この計画の挫折によってスコットランドがイングランドに、身売りせざるをえない状況が動かぬ現実となったことは疑いないところです。その反面、イングランドの策謀への怨み、合同支持派への憎悪がいちだんと高まったこともたしかですが、文字通り背に腹は代えられぬところまで、追い込まれたこともたしかでした。結局、これにイングランド王位継承問題がからまって、イングランド側はいっそう圧力をつよめ、かたわら議会筋を中心に大買収工作を行なって、ついに両国議会の合同が実現することになります。

この事件の経過からあきらかなことは、失敗に終わったとはいえ、スコットランドが独自の対外・植民政策を遂行しようとしたこと、さらにいえばこの初期帝国主義の時代に背伸びをして植民帝国の仲間入りをしようと企てたことでして、これは同じナショナリズムといってもアイルランドとは決定的にちがう点といわざるをえない。アイルランド人は、ドンキホーテ的な企てにはこと欠かぬ民族ですが、他国に進出して支配圏をつくろうなどはしなかった。また、合同によってスコットランドが果して利益を得たかという問題についていえば、もちろん実現しなかった事態との比較は単純ではありませんけれど、合同がなければ経済成長はもっとおくれたであろうこと、おそらくはもっと厄介な事態が起こって、相当な年月にわたって経済成長どころの騒ぎではなかったのではないかとは、かなりの確率でいえるのではないでしょうか。そして、その結果、一八世紀の輝かしい文化的達成にもかなりの否定的な影響があったはず、とみられます。一世紀遅れのアイルランドの合同との比較は残念ながらできませんが、はるかに大きな意味があったことは疑いないことと思われます。

結び

一回の講演ですませるにはいささか無謀な、まさにダリエン計画に似た身の丈を越えたテーマを取り上げたのでは

ないかという懸念は初めからありましたが、どうやらその心配がそのまま現実になったようで、聴く方もさだめしお疲れになったことと思います。今日の話は、スコットランド史をかじりはじめた私がかなり気ままに自分の知りたいことを並べ立てては、ああだろうかこうだろうかと自問するのにおつきあいいただくことになってしまいました。タイトルの「不思議」は解けないままに終わったのではないかと申し訳なく思いますが、反面こういうスコットランド史理解の大枠に関わってくるような野心的な問題を選べるのは、初心者――それも齢いささか傾いて臆面もない発言が許される厚顔な初心者――の特権ではあるまいかという、半ば確信犯的な気持ちも正直言ってありました。問題の解決よりは問題提起を主眼としましたので、その中に解決への手がかりになる設問が一つでも二つでも入っていましたら、私としては幸せとしたいところです。

話終えて改めて感じるのは〈地域〉の問題と、それを歴史の中でとらえることの厄介さです。スコットランドにはハイランドという入れ子のような存在があって、それはアイルランドの大きな飛び地のような性格を持っていますが、そのアイルランドにもアルスターという入れ子があって、それはロウランドの飛び地的性格を濃く持っています。そのロウランドにはイングランドとの間に近しさと反発のアンビバレンツがあり、ハイランドとのへその緒も切れかけたり強まったりします。何とも混み入った枠組みですが、それがまた時代により問題によって、同じ地域でも異なった国、異文化の相貌を帯びてきますし、相互の関係も変わってきます。そういう面倒がありますが、それだけに腑分けがうまく行ったときの快さもこたえられぬものがあろうかという気がします。私のとりとめない話が、そういう食欲をそそるアペリティフになれば望外の幸せです。ご静聴ありがとうございました。

〔後記〕本稿は一九九七年九月二八日、大阪経済大学で行われた第一回関西アイルランド史研究会での同題の講演内容である。本誌掲載にさいして当日割愛した部分を入れるなど、かなり手を加えた。また当日多数の方から貴重なコメントを頂いたが、本稿の論旨は基本的にもとのままとしたので、それらはほとんど採り入れていない。感謝とともに一言お断りしておく。なお本稿のような形にする機会が与えられたのは、大阪経済大学日本経済史研究所長の松村幸一教授のご好意による。あわせて感謝の意を表したい。

（たかはし　てつお・大阪商業大学教授、甲南大学名誉教授）